

『ドラマ・リーディング』

宮沢賢治作

銀河鉄道の夜

V
e
r.
4

脚色
渡辺知明

45-3

●登場人物

語り 1	母	牛乳屋	カムパネルラ	人びと	語り 2
ジヨバンニ	学者	ザネリ	カムパネルラ		
カムパネルラ	鳥捕り	牛乳屋	カムパネルラ		
人びと	学年	ザネリ	カムパネルラ		
車掌	青年	牛乳屋	カムパネルラ		
燈台守	男の子(八つくらい)	ザネリ	カムパネルラ		
(老人)	女の子(十一くらい)	牛乳屋	カムパネルラ		
	マルソ	ザネリ	カムパネルラ		
	カムパネルラの父	牛乳屋	カムパネルラ		

一、午後の授業

先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帶のようなどころを指しながら、みんなに問い合わせました。

「では、みなさんは、そういうふうに、川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニは手をあげようとして、やめました。あれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このごろ毎日、教室でもねむく、本を読むひまもないでの、どんなこともよくわからぬという気持ちがするのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立つて見ると、もう答えることができません。ザネリが前の席からふりかえって、くすっとわらいました。ジョバンニはどうぞまぎしてまつ赤になつてしましました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしよう。」

やつぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんども答えることができません。

先生は困つたようすで眼をカムパネルラの方へ向けました。

「では、カムパネルラさん。」

すると、あんなに元気に手をあげたカムパネルラが、もじもじ立ち上つたまま答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくカムパネルラを見ていましたが、「では。よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を、大きい望遠鏡で見ますと、たくさん小さな星に見

語り

先生

語り
先生

えるのです。ジョバンニさん、どうでしょう。」

ジョバンニはまつ赤になつてうなずきました。眼には涙がいっぽいでした。

ジョバンニ そうだ僕は知っていたのだ、もちろん、カムパネルラも知っている。いつかカムパネルラのうちでいっしょに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。

カムパネルラが、お父さんの書斎から巨きな本をもつてきて、「ぎんが」というところをひろげ、まつ黒なページいっぱいに白い点々のある美しい写真を見たのでした。

ジョバンニ (カムパネルラが忘れるはずもないのに、返事をしないのは、ぼくがこのごろ仕事がつらくて、学校に出てもみんなと遊ばないのを氣の毒がつたからだ。)

先生はまた云いました。
「ですから、この天の川を川だと考へるなら、一つ一つの小さな星はみんな川の底の砂や砂利の粒にあたるわけです。また、これを、巨きな乳の流れと考へるなら、星はみな、乳のなかに細かに浮かんでいる油脂の球にあたるのです。そんなら、何がその川の水にあたるかと云いますと、それは光をある速さで伝える真空というもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮んでいます。わたしども、天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そして、そのなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見え、したがつて、白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

先生は、光る砂のつぶのたくさん入つた大きな両面凸レンズを指しました。

「天の川の形は、ちょうどこんなです。いちいちの光るつぶがみんな、じぶんで光つてゐる星だと考へます。太陽がほぼ中ごろにあつて、地球がすぐ近くにあるとします。みなさんのが夜、このまん中に立つてレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄いので、わずかの光る粒すなわち星しか見えないので。こつちやこつ

ちの方は厚いので、星がたくさん見え、遠い星は、ぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なのです。そんなら、このレンズの大きさがどれ位あるか、またさまざまの星については、もう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。今日は、その銀河のお祭なのですから、みなさんは外へ出てよく空をごらんなさい。では、ここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして、教室中はしばらく机の蓋ふたをあけたりしめたり、本を重ねたりする音がいっぱいでした。まもなくみんなは、きちんと立つて礼をすると教室を出ました。

語り

語り

語り

語り

語り

語り

語り

語り

三、家

語り ジョバンニが勢いきおいよく帰つて来たのは、裏町の小さな家でした。入口の空き箱には紫むらさきい

るのケールやアスパラガスが植えてあり、二つの小さな窓には日覆ひおおきいが下りたまでしました。

語り ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。
ジョバンニ「お母おつかさん。いま帰つたよ。工合くわい悪くなかったの。」

母 語り 「今日は涼すずくてね。ずっと工合くわいがいいよ。ジョバンニ、お仕事がひどかつたろう。」
お母おつかさんさんはすぐ入口の室やに白い巾きんを被かぶつて寝ねんでいます。ジョバンニは窓を開けました。

ジョバンニ「お母おつかさん。今日は角砂糖を買つてきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。姉さんはいつ帰つたの。」

母 語り 「三時さんじころ帰つたよ。みんなそこらをしてくれてね。」
ジョバンニ「お母おつかさんの牛乳は来ていらないんだろうか。」

母 語り 「来なかつたろうかねえ。」
ジョバンニ「ぼく、とつて来よう。」

母 語り 「あたしはゆつくりでいいんだから。姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。お前さきにおあがり。」
ジョバンニ「では、ぼく、食べよう。」

語り ジョバンニは窓のところからトマトの皿いんをとつて、パンといつしょにむしゃむしゃたべ

二、活版所

語り ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人がカム・パネルラをまん中ににして校庭の隅すみの桜の木の下に集まつていきました。こんやの星祭に青いあかりをつけて川へ流す鳥瓜からすうりを取りに行く相談らしかつたのです。

けれどもジョバンニは、手を大きく振ふってどしどし学校の門を出て来ました。町の家々では、いちいの葉の玉をつるしたり、ひのきの枝にあかりをつけたり、銀河の祭の仕度しどをしていました。

ジョバンニは家へは帰らず、町の大きな活版所にはいつてゆきました。小さな平たい函はこをとりだして、たくさん電燈のついた植字台の前へしゃがみ込むと、小さなピンセツトで粟粒あわづぶぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。

六時ろくじがうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾つた活字をいっぱい入れた平たい箱はこを手にもつた紙きれと引き合せました。

それから、受付で小さな銀貨を一つ受け取ると、俄にわかに顔いろがよくなつて、威勢いせよくおじぎをすると、おもてへ飛びだしました。

語り それから元気よく口笛くちぶえを吹きながらパン屋パンやへ寄つて、パンのか塊かたまりを一つと角砂糖を一袋かぶ買いますと一目散いちもくざんに走りだしました。

ました。

ジョバンニ「ねえお母さん。ぼく、お父さんはきっと、間もなく帰つてくると思うよ。」

母 「あたしもそう思う。おまえは、どうしてそう思うの。」

ジョバンニ「今朝の新聞に、今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

母 「だけどねえ、お父さんは漁へ出でないかもしない。」

ジョバンニ「きっと出でているよ。お父さんが監獄へ入るような悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのトナカイの角だの、今

だつてみんな標本室にあるんだ。」

母 「この次はおまえにラツコの上着をもつてくるといつたねえ。」

母 「悪口を云うの。」

ジョバンニ「うん、けれども、カムパネルラは決して云わない。みんなが云うときは気の毒そ

うにしているよ。」

母 「あの人のお父さんとうちのお父さんとは、おまえたちのように小さいときからお友達

だつたそうだよ。」

ジョバンニ「お父さんは、ぼくをカムパネルラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかつたな。学校から帰る途中、たびたびカムパネルラのうちに寄つた。アルコールラムブ

で走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなつて、電柱や信号標もつい

ている。アルコールがなくなつて石油をつかつたら、罐がすつき煤けたよ。」

母 「そうかい。」

ジョバンニ「いまも毎朝、新聞を配りに行くけれど、いつでも家中しいんとしている。」

銀河鉄道の夜

ジョバンニ「ザウエルという犬がいるんだ。しつぽが篭のようで、ぼくが行くと鼻を鳴らして

ついてくる。今夜はみんなで鳥瓜のあかりを川へながしに行くんだつて。きっと犬もつ

いて行くよ。」

母 「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

ジョバンニ「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくる。」

母 「行つておいで。川へは、はいらないでね。」

」

」

」

ジョバンニ「ぼく、岸から見るだけだよ。一時間で行つてくる。」

母 「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒になら心配ないから。」

ジョバンニ「きっと一緒に。窓をしめて置こうか。」

母 「ああ、どうか。もう、涼しいからね」

ジョバンニ「では一時間半で帰つてくるよ。」

語り

ジョバンニは立つて窓をしめ、お皿やパンの袋を片附けると、靴をはいて勢いよく暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来ました。坂の下には、一本の大きな街燈が青白く光つて、立つていました。

ジョバンニが街燈の下に来たとき、ザネリが、えりの尖つた新しいシャツを着て暗い小路から出て来ました。

ジョバンニ「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」

ザネリ「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」

語り

ジョバンニは、ばつと胸がつめたりなり、そこら中きいんと鳴るようでした。

ジョバンニ 「何だい。ザネリ！」

語り ジョバンニは高く叫び返しましたが、ザネリはもう家の中へはいつていきました。

ジョバンニ (ザネリは、どうしてあんなことを云うんだ。ぼくがなんにもしないのに。ザネリはばかりだ。)

ジョバンニは、さまざまの灯や木の枝できれいに飾られた街を通つて行きました。

時計屋の店には明るくネオン燈がついていました。海のような色の厚い硝子盤に載つたいろいろな宝石が星のようゆつくり循っています。まん中には円く黒い星座早見が、アスパラガスの緑の葉で飾つてありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

日にちと時刻に合せて盤をまわすと、そのときの空が楕円形のかたちにあらわれるようになつていました。まん中には、ぼうとけむつた銀河が上から下へ帯になつて湯気でもあげているように見えました。

店の奥には三本脚の望遠鏡が黄いろく光つて立ち、壁には、獣や蛇や魚や瓶の形を書いた大きな星図がかかつっていました。

ジョバンニ (ほんとうに、こんな蝎だの勇士だのが、空に居るのだろうか。そんなところを、どこまでも歩いて見た)

ジョバンニは俄かにお母さんの牛乳のことを思いだし、その店をはなれました。澄みきつた空気が水のように通りや店の中を流れています。街燈はみな、もみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木には、たくさんの豆電燈がついて、人魚の都のようでした。

子どもらは、みんな新らしい着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、「ケンタウルス、露をふらせ」と叫んで走つたり、青いマグネシヤの花火を燃したりして遊んでいます

語り ジョバンニはいつか、ポプラの木が幾本も高く星ぞらに浮んでいる町はずれに来ていました。牛乳屋の黒い門を入り、うす暗い台所の前に立つて帽子をぬぎました。

ジョバンニ 「今晚は、」

語り ジョバンニ 「今晚は、ごめんなさい。」

語り ジョバンニ 「家の中はしいんとしています。」

語り ジョバンニ 「今晩は、ごめんなさい。」

語り ジョバンニ 「いま誰もいないので、わかりません。あしたにして下さい。」

語り ジョバンニ 「おつかさんが病気なんです。今晚でないと困るんです。」

語り ジョバンニ 「ではもう少したつてから来てください。」

語り ジョバンニ 「そうですか。では、ありがとうございます。」

語り ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

語り ジョバンニが十字になつた町のかどを、まがろうとしましたら、六七人の生徒らが、めいめい鳥瓜の燈火を持って、口笛を吹いたり笑つたりして、やつて來ました。

語り 笑い声も口笛も聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニはどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そくそつちへ歩いて行きました。

語り 「川へ行くの。」とジョバンニが云おうとしたとき、ザネリがまた叫びました。

子どもたち 「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」

語り 「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」